

私たち「方正友好交流の会」の活動によって、ハルビン市郊外の方正県にある日本人公墓の存在が少なからず人々に知れ渡ってきた。しかしこの会が、前身の「ハルビン市方正地区支援交流会」(以下、支援の会)の後を受けて発足した2005年当時は、まるで知る人は少なかった。

例えば、10人ほどの中国通の集まりの時、私たちが出版したばかりの『風雪に耐えた日本人公墓—ハルビン市方正県物語』をPRし「方正県に日本人公墓があるのをご存じですか」と問うと誰も知らなかった。その中に北京駐在経験の新聞記者が3人もいたにもかかわらず、である。

中国政府もことさら宣伝めいて日本人公墓の存在を知らせることもなかった。おのずとその存在を知っていたのは旧満洲に開拓民として入った一部の人、日中友好運動に古くから携わっていた人たちのほんの一部の人だけだったのではないだろうか。

詳しい経緯を省くが、「支援の会」の末端にいた私が初めて方正県の日本人公墓を訪れたのは1993年の時だった。そこには二つの公墓が建立されていた(写真右)。

正面に向かって右側に立つのが「方正地区日本人公墓」である。1945年8月9日のソ連参戦、8月15日の日本敗戦は、開拓民たちの環境を大きく変えた。ソ連兵たちの襲撃を避けるために開拓民たちの必死の逃亡が始まった。今まで微笑みで接した中国人たちが険しい顔をして襲ってきた。

ソ連との国境沿いにいた多くの開拓民たちは、ハルビンまでたどり着けばなんとか日本に帰れると思っていた。ハルビンは遠いが、その途中にある方正に行けば、な

んとか生き延びることができる。方正は関東軍の食糧基地としても知られていた。時には幼子を捨て、あるいは絞殺し、人々は方正にたどり着いた。しかし関東軍はすでにいなかった。飢餓と伝染病が人々を襲った。そうして5000人近い人々が亡くなった。すでに方正地区では人民政府が成立していた。1946年春になると凍っていた死体は溶けはじめ腐乱してきた。人民政府はその死体を3日3晩かけてガソリンを放って焼いた。そうして方正県の砲台山に埋めた。

その白骨の山を1963年、残留婦人の松田ちよさんが再び見つけた。それ以前の1948年、松田さんが砲台山に入った時、その白骨の山を見つけたが、ただ草花を捧げ、南無阿弥陀仏を何回か唱えることしかできなかった。しかし今度は違った。松田さんはなんとか自分たちで埋葬できないものかと思ったのである。公墓建立はこんな経緯から始まった。

(続く)

方正日本人公墓とは何か  
方正友好交流の会事務局長・大類善啓



‘わんりい’ 6月号「中国城市めぐり(25)・紹興市そのⅢ」(‘わんりい’ HP/ ‘わんりい’ 会員達のエッセイ <http://wanli-san.com/teranishi/title.html>) で、筆者の寺西英俊さんは、文の最後で「方正地区日本人公墓」に触れている。関心を持たれた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。毎月発行の‘わんりい’をお送りしている日中友好協会機関紙「日本と中国」の元編集長・大類善啓氏が、この「方正地区日本人公墓」の紹介活動を続けている「方正友好交流の会」事務局長を務めていらっしゃる、日本人公墓の存在を知りました。

日中友好の礎として、この公墓の存在意義を感じ、一人でも多くの方に知って頂きたく、大類氏にお願いし、特別に‘わんりい’のために「公墓」と「方正友好交流の会」について3回シリーズで寄稿頂きます。(田井)